

吉村昭が描いた天狗党

「動く牙」と「天狗争乱」福井の旅

会期：令和2年9月18日(金) 12月16日(水)

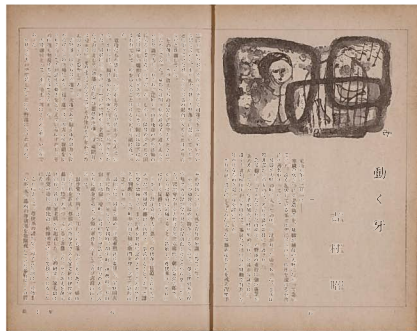
平成29年(2017年)に福井県ふるさと文学館と「おしどり文学館協定」を締結し、文学館同士の連携事業を行っています。今回は福井を舞台とする吉村作品から、

「動く牙」(『磔』昭和50年文藝春秋)と「天狗争乱」(平成6年朝日新聞社)を取り上げました。元治元年(1864年)3月に起きた天狗党の乱を題材に、世の変化に取り残された尊王攘夷派を描く歴史小説です。

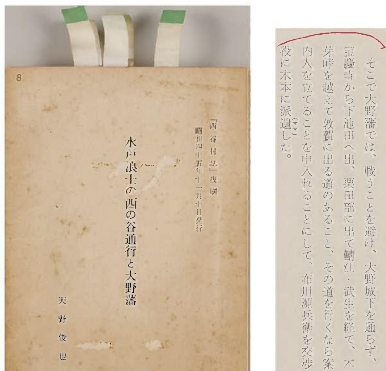
天狗党の乱とは、水戸藩尊王攘夷派(天狗党)の藤田小四郎が、筑波山で挙兵したことに始まる一連の争乱です。水戸藩家老武田耕雲斎を総大将とする天狗勢は、農民や下級武士を含む千人余りの大集団となつて、尊王攘夷に理解を示す一橋(徳川)慶喜を頼り、朝廷に志を訴えるため京都を目指しました。幕府の追討軍と戦いながら、

下野(栃木県)、上野(群馬県)、信濃(長野県)、美濃(岐阜県)を進み、越前(福井県)に至ります。しかし、敦賀の新保にたどり着いた時、初めて敬慕する慶喜が追討軍の総指揮をとっていることを知り、総攻撃を受ける直前に降伏しました。加賀藩から、幕府に引き渡された後の慶応元年(1865年)2月、敦賀の来迎寺境内で、武田、藤田らを含む352名は斬首され、残る約470名も遠島、追放、水戸渡しなどの処分となりました。

吉村は、執筆にあたり、各藩の記録や市



【写真1】「動く牙」
(『別冊文藝春秋』第130号 昭和49年12月 文藝春秋)
昭和40年頃、敦賀で天狗勢が幽閉された鎌蔵や、武田耕雲斎等墓を見たことが執筆のきっかけだった。(当館蔵)



【写真2】天野俊也「水戸浪士の西の谷通行と大野藩」
(『西谷村誌』抜刷 昭和45年)
大野での天狗勢を捉えることができた資料。付箋を貼付。
(右) 付箋箇所の一つ。藩が布川源兵衛を交渉役として派遣した経緯に印を付けている。(津村節子氏寄託資料)



【写真3】石井左近「敦賀と水戸烈士の話」
(昭和46年 敦賀郷土博物館)
八幡神社宮司であった著者を訪ねた際に提供された資料。
(右) 加賀藩が降伏後の天狗勢に届けた米、漬物、酒、鰯などの数量を確認している。(津村節子氏寄託資料)

史、研究書など膨大な資料を収集・調査しました。展示では、これら旧蔵書の一部や、

自筆取材ノート、自筆原稿などを紹介しました。書き込みや付箋のメモをたどり、資料に基づいて、どのように天狗党を描いたのかをご覧いただきました。また、敦賀市立博物館提供の武田耕雲斎所用陣羽織や天狗党史跡、大野市提供の大野城などの写真パネルを展示しました。

ここでは、展示内容の一部を報告します。

「動く牙」と「天狗争乱」

尊王攘夷思想は、当時、全国の有能な人々に強烈な影響をあたえたが、それは時間の流れとともに変形し、消えていった。その中で天狗勢のみは、信奉の姿勢をくずさず、それが悲劇となったと言わなければならない。

「あとかき」(『天狗争乱』)

「動く牙」(『別冊文藝春秋』第130号 昭和49年12月 文藝春秋)は、越前に進入した天狗勢が降伏し、捕らえられ、処刑されるまでを描いた作品です【写真1】。降雪の難所である蠅帽子峠を越え、越前大野藩領に到達する経緯や藩との攻防、天狗勢に対する加賀藩永原甚七郎の温情と、幕府による非情な処分を活写しました。

「動く牙」発表から16年後、吉村は、水戸脱藩士らによる大老井伊直弼の暗殺事件を描く『桜田門外ノ変』(平成2年 新潮社)を刊行しました。水戸で興った尊王攘夷思想をより深く理解するためには、事件の4年後に起きた天狗党の乱を書く必要があると考え「天狗争乱」の執筆に取り組みます。「朝日新聞」(平成4年10月1日、翌年10月9日)連載後、加筆改稿を経て、平成6年に単行本を刊行し、大佛次郎賞を受賞しました。

尊王攘夷思想は激動する時代とともに、急速に変質し、倒幕へと移行しました。「社会思想は時代の変化とともに変貌する宿命をもつ」ことを「意識することなく行動」したことに「天狗勢の悲劇」があるとして、その「悲劇」を描きたかったと述べています(『天狗勢と女』吉村昭歴史小説集第二巻)

平成21年 岩波書店)。諸藩の動揺と幕府の動き、嘆願を拒否した慶喜の思惑とともに、行軍の過程を克明に記しました。信義を重んじ、交戦を望まず、肅々と旅した天狗勢の末路を掘り下げています。

「動く牙」文献資料について

昭和49年秋、吉村は「動く牙」執筆のため、現地調査を行いました。福井県立図書館での資料調査に始まり、大野の蠅帽子峠や、天狗勢が本陣とした杉本弥三右衛門宅のほか、敦賀では、降伏の会議をした新保村の屋敷、劣悪な環境で幽閉された鎌蔵や、墓を取材しました。

展示では、この旅で調査した資料を取り上げました。天野俊也「水戸浪士の西の谷通行と大野藩」(『西谷村誌』抜刷 昭和45年)には、天狗勢との交渉役となった町年寄布川源兵衛に関する記述に赤線が多く見られます【写真2】。また、石井左近「敦賀と水戸烈士の話」(昭和46年 敦賀郷土博物館)より、降伏後の加賀藩の対応や苛酷な鎌蔵での幽閉生活、武田金次郎(武田耕雲斎孫)の処分に着目していることを紹介しました【写真3】。

「天狗争乱」文献資料と自筆資料について

「天狗争乱」執筆時には、天狗勢が通過した各地を徹底取材し、郷土史家や研究者を訪ね、収集した文献の調査を重ねました。

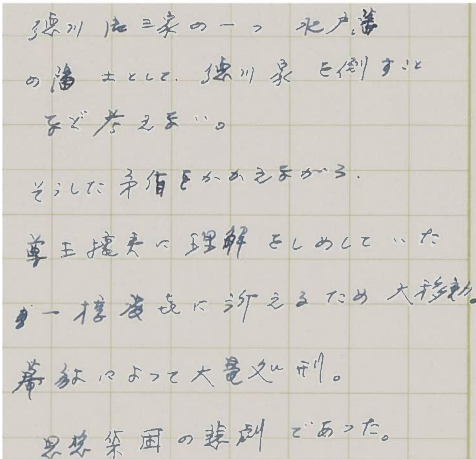
今回は、作品の冒頭で記された天狗勢の田中憲蔵隊による栃木町焼き討ち事件の研究書、稲葉誠太郎『水戸天狗党栃木町焼打事件』（昭和58年 ふろんていあ）を展示しました。

また、武田の妻子や、天狗勢と共に旅した女性と赤子の存在を調べた資料に注目しました。関山豊正『元治元年―那珂湊の大戦―』（昭和45年私家版）では、武田の妻子が赤沼で投獄された箇所にも多くの線が引かれ、貼り付けた付箋に「妻子」とメモしていることを紹介しました。さらに、河内八郎「野州における天狗党争乱（続）―元治元年11月の通過をめぐる問題―」（『栃木史



書の顔をさがしてみた。以下に2点を示す。まず、(2)では、最後の降伏のとき、1人ではあるが、「市毛源七母見恵（みえ）」という名前が記されていることが注目される。(3)は、上州高崎藩兵と交戦した際の「雑記」であるが、2人で、1人は60歳ぐらいの老母、もう1人は、赤子を背負った者である。

【写真4】河内八郎「野州における天狗党争乱（続）―元治元年11月の通過をめぐる問題―」（『栃木史心会会報』昭和61年9月）
（上）表紙「会報」の右上に「女」と書き込みがある。（下）「市毛源七母見恵（みえ）」の名に線を引き。前頁では、女性たちの人数や年齢に線を引き、通過した地名を青色の丸印で囲んでいる。（津村節子氏寄託資料）

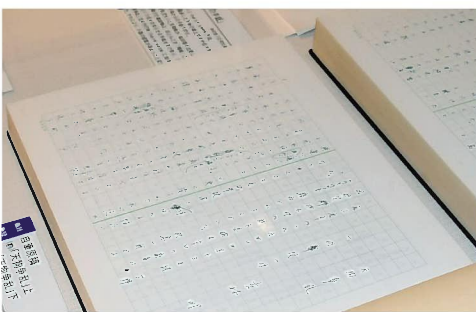


【写真5】自筆メモ「天狗争乱」10枚目
（津村節子氏寄託資料）

心会会報」昭和61年9月）より、夫と息子が天狗勢に参加した「市毛源七母見恵（みえ）」に関する書き込み箇所をたどりました【写真4】。作中、夫と息子を見届けたい一心から、女性で唯一、蠅帽子峠を越える姿を描いています。また、鎌蔵で幽閉された後、水戸で投獄され、ついに息を引き取る姿を記しました。

吉村のもとには、連載中、天狗勢ゆかりの地に暮らす読者や郷土史家から数多くの手紙が届きました。中でも、和田宿を出発した天狗勢が掲げた旗指物のほとんどは「襦袢」だったという伝承を知り、衝撃を受けたと述べています。自筆原稿「読者からの手紙」（『史実を歩く』所収平成10年文春新書）の記述をたどり、この情景を文庫刊行時に加筆したことで「小説の密度」が高まったような「満足感をおぼえた」という吉村の創作姿勢を紹介しました。

尊王攘夷の思想を信奉する者も反対する者も、思想からはなれて、釈明の機会を一切あたえずに大量処刑した幕府の残虐さに、その政治態勢が明らかに末期にあるのを強く感じたのである。
（「天狗争乱」）



【写真6】自筆原稿「天狗争乱」（上）（下）
手前が上巻の1ページ目、右奥下巻。
（津村節子氏寄託資料）

敦賀での終息から3年後、元号は、明治に改元されました。自筆メモ「天狗争乱」には「徳川御三家の一つ水戸藩の藩士として、徳川家を倒すことなど考えない。」とあり、「そうした矛盾をかかえながら」慶喜に「訴えるため大移動。幕府によって大量処刑。思想集団の悲劇であった。」と記しています【写真5】。吉村は、連載前のインタビューで「特定の人物」ではなく「天狗勢という群れ」を主人公に描くと語りました（『朝日新聞』平成6年10月1日）。冷徹に行軍を記すことで、千人余りからなる一つの集団を浮き彫りにしています。全900枚以上の自筆原稿は、上下巻に製本し、書齋で保管していました【写真6】。

展示をご覧になった方々は、幕末の水戸や福井の歴史について、より一層関心を深めていました。また「貴重な資料、書き上げるまでの過程が興味深かった」という感想や、「世の中を良くしたい気持ちの集団の発想が、現代にも通じるテーマでは」との言葉もありました。今の世の中と作品を照らし合わせ、天狗勢に対する吉村のまなざしに思いを寄せる方もいらっしゃいました。

（学芸員 深見美希）



見える思い出深いしだれ桜をデザインしました（左）。もう一点は、吉村愛用の靴や万年筆、ノートをモチーフに取材の旅を表しました（右）。アンケートに寄せられたご要望を踏まえ、今後両館で共に取り組んでいます。

観覧アンケートに回答いただいた方へ、おしどり文学館グッズをプレゼントしました。季節毎に花が咲くと私は庭に出て枝を見上げたり、しゃがんだりして花を見るのが楽しみで、そんな私を書齋の窓から見ている夫が、「花の好きな女だなあ」と言っていた。その口調は果れ気味ではあるが、好ましく思っているように聞えた。／夫の書齋は遺したので、その窓の下に植込みだけは残っている。大輪の白椿、しゃくなげ、夫の好きな紅梅、そして夫が亡くなる前年に二人で買いに行ったしだれ桜――。

津村節子「紅色のあじさい」

『夫婦の散歩道』平成24年 河出書房新社協定を締結している福井県ふるさと文学館は「吉村昭と匠」（会期・令和2年11月23日〜12月23日）を開催し、『雪の花』（昭和63年新潮文庫）や『冬の鷹』（昭和49年毎日新聞社）を紹介しました。また、会期中、福井県ふるさと文学館は一筆箋を、当館は活版印刷で製作したコースターをプレゼントしました。津村節子氏の随筆より、書齋の窓から